蘇芳集

むかしから

青山　丈

麦藁帽での行く先は決めてある
むかしから茸並べる八百屋かな
白粉花の今でも知らぬ家に咲く
咲いてゐる中より落ちた白木槿
老人が老人へ出す秋のこゑ
瓢箪をいまもかがんで抜けてくる
文月や稲畑汀子全句集

細目して

冨田正吉

茅の輪とはてぶらでくぐるところかな
考へるために扇を使ふなり
細目して百日紅を見てゐたり
汗かいて青空近くなりしかな
でで虫を見た日はすぐに帰らねば
生きてゐて人に逢ふごと蓮に会ふ
嘆くもの白さるすべりのみならず（中谷信子さんを悼む）

胡桃

野路斉子

小鳥来るこの樹この枝この梢
秋草に「工事一旦中止」札
遠くまで胡桃拾ひの人の声
信号が待てぬ胡桃が落ちさうで
灯の町の灯を従へて今日の月
咲きゐたる気のしてからすうりの花
どきつとする小さな菊にはや蕾

水撒いて

別府　優

湯に浸す手拭ひ熱く夾竹桃
水撒いて仲見世広くしてをりぬ
蓮の花近くに見えて近付けぬ
太宰忌の炊き込みご飯届けけり
河童忌のちよつとだけなる蝉のこゑ
昼寝覚厨がらんとしてをりぬ
暗きより声を涼しく佃煮屋

昏れてなほ

前田　陶代子

養生の夫の明け暮れ凌霄花
雨後の日の気儘のうぜんかづらかな
万緑の中のひとりとして佇てり
低く身を入る満開の薔薇の門
静寂ふかめて夏椿夏つばき
葉桜の青きざわめき昏れてなほ
晩涼の指輪せぬ指たよりなき

白日傘

峰岸　よし子

月光を紡ぎてからすうりの花
白南風や幌が帆となる乳母車
日にかざすラムネの瓶の底は海
力抜くとき草苗の鳴りにけり
ひたひたと波さやさやと夏柳
聖堂に祈る背ひとつ日の盛
原爆ドーム静かにたたむ白日傘

戦争のつづく国

宮尾　直美

何もかも見られてをりぬ吊忍
戦争のつづく国あり鰻焼く
ちちははを越ゆる齢や雲の峰
白靴を干す庭先の一等地
月涼し青き畳にあをき影
涼風や胡座の中に子のあぐら
一帆の傾ぎて遠し浜万年青

翡翠

八木下末黒

塵捨てと南瓜の花の朝かな
河童忌や一輪挿しに烏瓜
真夜中に覚めて水飲む餓鬼忌かな
翡翠の飛翔の刹那色こぼす
翡翠や弓の矢羽根が風を切る
大壺に向日葵どんと活けてみる
仏壇の前に提灯魂迎へ

芋の花

吉田幸敏

ジャムを煮て四万六千日暮るる
鍬二本浸してありぬ草泉
かたつむり信玄道を行くといふ
肩の子の祭囃子の口拍子
子とろ子とろ秘すべきものに芋の花
すべりひゆいくさの日々のそのままに
川の面の月のくしやくしや広島忌

七月の日暮

小川美知子

青桐の風青桐へ移りけり
砂利踏めば誰か砂利踏む炎暑かな
候補者一行炎天をやつて来る
大木は大木として炎天下
蝉鳴いてゐるこちら岸あちら岸
手を洗ふとき峰雲を思ひけり
使ひ出のある七月の日暮かな

盛夏

木内憲子

それぞれに机上の曠野七月来
窓外に見る街白き盛夏かな
座りても立ちても無口冷房車
白昼の火種のごとき蝉のこゑ
辺りしづかに蝉落ちてゐる真昼
人影のアイスティーより淡きかな
鏡中に椅子一脚のある大暑